

「まち」の中で生きる

2003年が明けてまもなくのある日、社会福祉法人アンサンブル会代表の小椋年男さんからうれしいお便りが届きました。



新年明けましておめでとうございます。
今年も相変わらずよろしく願いいたします。

昨年9月より伊那養護学校保護者からの強い要望があり、上伊那地区に新しい障害者施設を作るべく活動を開始しました。

その時を待っていたかのように、たちまちにして大勢の保護者の方々が集まり、そのうちの一人から土地提供の申し出もあり、驚異的なスピードで進捗しつつあります。

12月21日には、発起人会の設立総会を開きまして、地域の県会議員が全員列席し、県の担当者も出席し、宣言文が読み上げられると、列席者からはハンカチで涙を拭く人が続出です。会長に選ばれた二人の障害のある息子の親が言いました。「私たちは立ち上がりました……」そうです。ここに障害のある子を持つ親が私たち（アンサンブル）に続いて立ち上がったのです。地域の関係者、関係機関は、こぞってこの計画に賛同しています。2005年の春には、また一つ、障害者も「まち」の中で生きることのできる新しい施設が誕生することになるでしょう。

新しい施設は、より重度の障害者も一緒にやっていくという方針で進めておりまして、中身の構想をあれこれ思案中でございます。

どこに、どんな障害のある子が生まれても、ちゃんとみんなの住む市民社会で生きていけるように……こんなささやかなあたりまえの思いが実現されないわけはありません……

小椋年男さんは、現在、松川町で知的障害者のみなさんの通所授産施設、「ワーキングスタジオアンサンブル」を開設しています。

昨年、私が訪ねた時、小椋さんから次のようなお話をお聞きすることができました。

「アンサンブル会は、飯田養護学校に通っている子どもの親が中心になって発足しました。卒業後、私の娘は、郊外の通所施設よりも、自分の生まれたこの町の中で生活したかったようです。自分で買い物をしたり、街の中を歩いたり、同じ年頃の子がやっていることを、娘もやりたかったのだと思います。その気持ちを感じた時、私は一大決心をしました。障害のある子も地域で生きていくことができる社会を築きたい、そのための拠点を作りたい、障害があっても、みんなと同じように、自分のやりたいことができるような環境をつくりたいと考えました。こうした同じ願いをもった保護者の皆さんが集まってアンサンブル会がつくられました。そして、発足一年半後に松川町から共同作業所として認可され、その後、より広がりのある活動と社会参加をめざす中、昨年10月に社会福祉法人の認可があ

り、今年4月、通所授産施設の新規開設にこぎつけました。」

小椋さんの案内で、ワーキングスタジオアンサンプルの見学をしました。2階から楽しそうな声が聞こえてきます。吹き抜けの階段を上がっていくと昼食の用意が始まっています。アンサンプルオリジナルのクッキーの甘い匂いに包まれて、エプロン姿のみなさんが笑顔で迎えてくれました。

「知的障害者の仕事というと特定の単純作業が用意され、個人の希望とか選択の幅が限られてしまう傾向があります。アンサンプルでは、その人の可能性を一から探してみたいと考えています。メインの仕事は、畑での野菜づくりです。作った野菜は『下伊那のやさしい船』の名前で出荷しています。今ここで作っているクッキーは、飯島町の道の駅でも売っていますよ。」

今年、飯田養護学校を卒業してアンサンプルに入った希^{のぞみ}さんがニコニコして私の側にきたので、「ここは、楽しいですか。」と聞くと、うれしそうに、「うん、楽しい！」と応えてくれました。

「障害があることを感じさせないような社会、松川町にはそんな雰囲気がありますよ。実は、うちの娘に行きつけの喫茶店ができてね。そこのマスターは、娘が行くのを心待ちにしているんですよ。」

喫茶店のマスターにお話をお伺いすることができました。

「いろんな人が集まれる場にしたい、高齢の方、障害のある方、日々介護をしている方、みんなのくつろぎの場になればと思っていました。そこで知り合ったのが小椋さんの娘さん^{まな}麻奈さんなんです。ここで麻奈さんもいろいろな人と自然に出会い、明るく伸び伸びと楽しんでいます。」

そして、アンサンプルに集まる地域の方は、

「ボランティアという言葉がありますが、周りの人たちから見れば私たちもボランティアかもしれません。でも、ここが楽しくて、この仲間が楽しくて自然に足が向くんですよ。私たちの方が、アンサンプルの仲間の皆さんから元気をもらっているんですよ。」

障害者も「まち」の中で快適に生きよう！小椋さんの理念とするノーマライゼーションの社会が、着実に地域に広がっていることを、この時、感じました。

そして、今度は、松川町から離れた伊那市にも、同じうねりが起こったことを小椋さんのお便りから知りました。

伊那市での設立総会の宣言文の言葉です。

私たち知的障害の子どもを持つ親は、わが子らが養護学校卒業後も、地域社会の中で尊厳を持ちながら生きていくことを願い、地域住民との日常の交流が可能となる場所に、わが子らの働く場・生きる場を求め、その実現を期す。……

わが子の豊かな未来を切り開くのはまず第一に親の力であることを私たちは改めて確認し、良き先達とともに新施設建設にむけて出発します。誰の責任でもなく、どの親のもとに生まれるか知れない知的障害のある子らは、まことに天からの授かりものであります。そうであれば、この子らが運命にもめげず幸せな生を送るか否かは、私たちの社会がどこまで成熟を遂げたかのバロメーターにほかなりません。……